

評

井上道義&大阪フィル
ハーモニー交響楽団

喜怒哀楽のままに夢の革命

大阪フィルハーモニー交響楽団が創立70周年。その記念でもある第50回東京定期演奏会を聴く(22日、東京・池袋の東京芸術劇場)。

曲はシヨスタコービチ。首席指揮



池上直哉氏撮影

者、井上道義の十八番。前半が第1次ロシア革命を描く交響曲第11番「1905年」。後半はロシア大革命とソ連成立を描く第12番「1917年」。

どちらも交響曲として型破り。前者

は約65分、後者は約40分、切れ目なし。しかも、ベートーベンの交響曲のように主題を、全知全能を尽くして展開するのは違う。チェーホフの芝居やチャイコフスキーのオペラに出てくる際限ないカードゲーム。たった数種類のカードが執拗にめぐる。凶柄は民衆の嘆き、怒り、革命指導者の号令、決起と騒乱など。展開なき反復。その要領で、長大な交響曲ができる。

そういう音楽の楽しみ方は、知的な読解とは違ってくる。映画音楽的、パレエ音楽的といってもよい。遊戯に耽り、大河にのまれて時を忘れる。井上

はクラシック音楽を知性中心主義から解放したくてたまらない。それこそ彼の夢の革命。そこに第11番と第12番が合う。井上が伊福部昭を振りたがるのも、同様の構成原理だからだろう。

大阪フィルは知的に醒めることがなかった。指揮者が「君子豹変す」の要領で、喜怒哀楽のカードを、脈絡を超越して切りまくる。それに全身全霊でついていった。特に弦楽器。第11番冒頭の虚脱した透明さ。革命暴動場面の灰汁の強さ。第12番のたがの外れたフィナーレでの管打楽器のてらいを捨てた頑張りも、手に汗を握らせた。井上の夢と一心同体になった。

彼は年度末で首席指揮者を退任する。もったいない気もある。が、とにかく最高の花道だった。

(片山杜秀・音楽評論家)